

譲れない前提

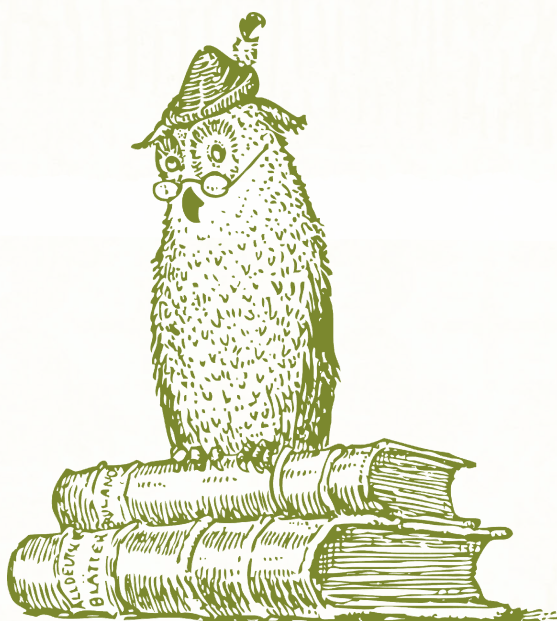
藤山 幹子

国立病院機構四国がんセンター皮膚科医長

ワークライフバランス問題には、みんなが頷ける正解がない。1人ひとりの正解は異なり、正解であったかどうかは、あとにならないとわからない。たくさんの分岐点で何かを選択しなくてはならないし、そのときには道の先がみえていないことが多い。選択が間違っていたのかもしれないとあとで思えることはある。ただ、あとからあちらを選べばよかったとくよくよ思い悩むことは、いまの自分を否定するような気がするので、それでよかったのだと思うことにしている。また、譲れない前提に基づいた選択であるなら、あとの結果がどうであれ納得しやすいのかもしれない。

振り返ってみると、仕事を続けていくかどうかの一番大きな岐路となったのは、産後に仕事を継続するかどうかという局面であった。ただ私の譲れない前提は、自分の、のちには子どもにおいても、人生の選択肢を増やすためには資金が必要、つまり仕事が必要ということであった。これはそれまでの自分の人生において、つくづく資金がなければ何も選べないのだということを実感してきたことによる。当時は仕事を辞めるか、8週の産休後に復帰して通常通りに働くかの二択しかなかったので、私の選択肢は復職の一択となった。以後も、どんな局面であれ、まずは仕事を続けていくには(無職にならないためには)、という観点から道を選択してきた気がする。

医師という職業を望んで選択したのではなかったが、仕事を始めてからは天職だと感じ、自分の興味ある分野で研究までできて、結果的には恵まれた状況にいると思う。仕事をしているかぎり、必ずその中に喜びと楽しみを見出せるのが、医師という仕事ではないだろうか。ただ、その根本には、高度な専門性が要求される職業であるという事実がある。家庭のために長い間、仕事につぎ込める時間の制限はあったものの、選択の余地なくブラン



クを最小限に仕事を継続したことで、どんどん進歩する皮膚科の知識にかろうじてついていき、経験を積むことができ、その結果として仕事が楽しく、これでよかったと感じていられるようになったのかもしれないと思う。

資金を稼ぐという使命は子どもの成長とともに終わりを迎えつつあり、いまやっと自分のしたいことを優先して選択できるようになった。そうして、一昨年、長年勤めた大学から出ることを選択した。この先はまだわからない。でもどうであれ、それでよかったと思うのだろう。